

# 漢字の覚え方について

武 部 良 明

## 1. 考察の観点

日本語の学習者については、大きく漢字系と非漢字系に分けることができる。漢字系の学習者というのは、日常生活に漢字を用いてきたほうで、中国語・韓国語を母国語とする場合のことである。これに対し、それ以外の場合が非漢字系の学習者である。

問題は、非漢字系の学習者にとって、文字と名づけられるものが表音文字に限られるということである。そのような立場から見ると、平仮名と片仮名は、いずれも自分たちの考えているような文字であり、それほど覚えにくい存在ではない。しかし、漢字の場合は、それらと全く異なっていることにとまどいを感じる。これもまた文字だといわれても、どうにもとらえようのない存在であり、とらえようのないものを覚えろといわれても、覚えようがない。それにもかかわらず、次々と際限なく漢字が出てくると、やがて漢字嫌いになり、日本語の学習そのものを断念し、落後するに至る。教える立場としては、このような事情をあらかじめ十分に心得ておくべきである。

つまり、非漢字系学習者にとって、漢字というのは、自分たちの既習知識の範囲で処理できない存在だということである。そのような漢字をとにかく覚えさせなければいけないが、それにはどうしたらよいか。その場合は、漢字というものについて、このように覚えなさいという覚え方まで指導しなければならない。以下、取り上げるのは、そのような立場でまとめた“漢字の覚え方”の基本である。

## 2. 漢字の字体

漢字というのは、形音義の三つの要素を併せ持つ文字である。そこで、まずそのうちの「形」から取り上げることにする。「形」というのは、漢字の字体のことである。

漢字の字体については、「マッチ箱をひっくりかえしたような文字」という言い方が行われている。それは、漢字がマッチの軸木のような直線的な字画で構成されていることを認識している点で、決して誤りではない。直線的な字画で成り立つのが漢字で、曲線的な字画で成り立つのが平仮名である。このことを教えるだけで、漢字仮名交じり文を見せてどれが漢字かどれが平仮名かを指摘させることができる。これが漢字認識の第一歩である。しかし、その漢字の部分について、それがどのような直線のどのような組み合わせで構成されているかは、とらえようもないというのが非漢字系学習者の第一印象である。それが「マッチ箱をひっくりかえしたような」という表現であり、まことにそのとおりである。

したがって、問題は、その雑然たる実態をどのように秩序立ててとらえさせるかということである。そのような雑然たる字体も、認識の単位に分けることにより、容易に認識できるからである。それは、初めてある外国語を聞いたときの印象とも似ている。異様な音が次々と続き、全くとらえようもないというのが実情である。しかし、それを語の組み合わせとして語ごとにまとめ、またそれぞれの語を音の単位に分けて基礎から学習すると、そのような連続音が単位音・単位語の組み合わせとして聴取できるようになるから不思議である。同じことを、漢字の字体についてまとめると、次のようになる。

漢字の字体の認識において第1に取り上げなければならないのが、漢字1字という単位である。この場合、漢字というのは、1字1字が一定の面積を占めているところに大きな特色がある。字画の多い文字も字画の少ない文字も、漢字1字という単位でその占める面積が一定している。これが漢字というものをとらえる出発点であり、発音のほうでいえば、これが語

に当たる単位である。例えば、「好・明」というのはそれぞれ1字であるが、「女子・日月」というのはそれぞれ2字である。「言・身・寸」はそれぞれ1字であるとともに、それを組み合わせた「討・射・謝」もそれぞれ1字である。

次にそれ以下の単位であるが、これについては、段階的に基本画と複合画に分けて考えるのが好都合である。まず、基本画であるが、これが漢字の字体を分解して得られる最小の単位である。発音のほうでいえば単音に当たるのが基本画である。これには点画と線画とがあり、線画に単画と複画とがあり、いずれも漢字の画数を数えるときの単位となるものである。以下、それぞれについてその特徴を取り上げると、次のようになる。

まず、点画であるが、これは幾何学的な点と異なり、いろいろの形をしている。「火・六・心・魚・洋」などに含まれる点画を見ても分かるとおり、方向もいろいろである。したがって、点画を特色づける要素に位置と形と方向の三つが見られることになる。これらのうち、位置と方向を持つことは、次に取り上げる線画の場合と同じである。形について見ると、「とめた形」と「はらった形」とがある。その立場から見ると、点画というのは、書き始めがそのまま書き終わりになった線画と考えることも可能である。その意味で点画は、線画の特殊な形と考えてもよいのである。

線画のほうは、点画と異なり、書き始めと書き終わりとを持つところに特色がある。したがって、線画にはそれをつなぐ一定の形があり、その形を構成する長さや方向がある。まず、形であるが、これに直線的な「ぼう」と、曲線的な「そり」とがある。「一・二・三」などは「ぼう」で組み立てられ、「八・人」や「川」の1画め、「大」の2画め3画めなどはいずれも「そり」である。他に二つの画を組み合わせたように見える「まがり」と「おれ」がある。「まがり」というのは「七・也・己」などの最後の画のように、二つの画が曲線部分を含んで一つの線画となっているもののことである。「おれ」というのは「又・力・弓」の第1画のように、二つの画が角をなして続いたものである。いずれも2画のように見えるがこれら

も1画とする。その立場で、本来1画のように見えるものを単画とし、2画のように見えても1画とするものを複画として区別するわけである。

次に長さであるが、線画は、点画と異なり、どの形の場合にも相対的な長さがある。「三」というのは三つの「ぼう」から成り立っているが、その長さは三つとも異なるわけである。また、方向であるが、このほうは大きく分けて「右上・右・右下・下・左下」の5方向となる。「十」というのは「右方向のぼう」と「下方向のぼう」とから成り、「大」というのは「右方向のぼう」と「左下方向のそり」と「右下方向のそり」とから成り立つわけである。

なお、線画としては、書き始めと書き終わりを持つところが点画の場合と異なっている。書き始めとしては、第1画をどこから書くかが決まっている。「一・二・三」の場合も、それぞれ第1画を書き始める位置が異なることになる。第2画以下は、前の画に対して、「はなす・つける・まじわる」という3種類の書き始めがある。「二」は「はなす」形であり、「工」は「つける」形であり、「十」は「まじわる」形である。次に、書き終わりであるが、これに、「とめる・はらう・はねる」の3種類がある。「一・二・三」はそれぞれ「とめる」形であるが、「十」の2画め、「大」の2画めと3画めはそれぞれ「はらう」形である。また、「丁」や「毛」の最後の画は「はねる」形である。はねる方向にも「左上・左下・右上・上」などがあり、いずれも2画のように見えるけれども1画として扱う。そのため、書き終わりを「はねる」線画も複画である。

以上が基本画であるが、実際にはこのような基本画を組み合わせた複合画の形で用いられる。したがって、複合画というのが漢字構成の単位であり、発音のほうでいえば音節に当たるものである。例えば、「仏・私・私」のように並べてみると、そこから「ム」という共通要素を取り出すことができる。これは一つの複画と一つの点画の組み合わせであるが、このような単位が、漢字構成の単位としての複合画である。同じようにして「仏」の「イ」も複合画であるから、「仏」は二つの複合画「イ」と「ム」から



成り立つことになる。このように考えると、漢字を覚える場合の単位は、基本画でなく、複合画だということが分かる。それは、語を構成する発音の単位が、単音でなく、音節とされるのと同じである。

なお、複合画についていうと、いろいろの変形の見られることも見逃してはならない。同じ「日」や「女」も、「早・妻」のように上下の部分で占めるときには横長になり、「昨・妹」のように左の部分では縦長になるからである。「土」の場合は、左の部分で占めると「地」のように最後の画が右上方向のぼうではらう形になる。その他、次のような場合も、いずれもこの種の変形と考えてよいのである。

足・距　食・飯　人・仏　手・扌　水・泣　火・照

これらの変形関係を心得ておくと、後で取り上げる意味との関連を考える上でも役に立つのである。

これで、漢字の字体を正しくとらえるための基本を終わるが、ここから漢字の字体の覚え方を導き出すと次のようになる。まず、漢字というのは一定の筆順に従って実際に書いて覚えることが必要だということである。漢字の学習法としては読みを覚えるほうが書きを覚えるよりも容易だとされている。そのため、読み書き共に学習する漢字の他に、読みだけを覚える漢字を取り出す行き方も行われている。しかし、読みだけ覚える漢字の場合も、書きの練習が必要である。実際に書いてみて複雑な字画を正しくとらえなければ、「失」と「先」、「拙」と「猫」の違いも分からなくなるからである。その点で、漢字は「目で覚える」ものではなく、「手で覚える」ものなのである。

ところで、非漢字系の学習者にとっては、個々の字画そのものを漢字らしく書くこと自体、決して容易なことではない。それは、母国語の文字を書くときに用いる字画と全く異なる字画を書くことになるからである。そこで、基本画の書き進め方の練習から始めなければならない。それは、ちょうど基本的な発音練習を重視するのと同じである。母国語にない発音を習得するには、母国語と異なる口の動かし方に習熟しなければならない

が、その場合に発音練習が必要なのも同じである。字面を書くこと自体は指の屈伸と手首の回転との組み合わせによるとしても、新しい字面を書くためには新しい組み合わせが必要である。この基本練習を怠ると、いつまでたっても漢字らしくない漢字を書くことになるのである。

こうして、漢字らしい字面が書けるようになり、それぞれの字面の識別ができるようになれば、一応の基礎ができたことになる。こうなれば、個々の漢字に接したときにその漢字の字面の組み合わせが認識できるようになるから、「マッチ箱をひっくりかえしたような」印象がなくなる。そうなれば、個々の字面の整然たる組み合わせが見えてきて、それぞれの字体としての特色を見失わずに書写できるようになり、漢字らしく整うようになる。それとともに紛らわしい字体の他の漢字とも識別できるようになり、字体として正しく学習できるようになるのである。

こうして、個々の基本画、複合画が書けるようになり、それらの組み合わせとしての個々の漢字の字体がとらえられるようになったとする。それを実際に何回も書くことによって覚えるわけであるが、そのときにどういうことに注意したらよいかということである。この場合の基本は、教科書どおりということである。「木」という漢字の場合に縦画の先がはねてなければ、はねない形で練習をするということである。これをはねても、「木」以外の文字となるわけではなく、日本人の中にもこれをはねて書く人が少なくない。しかし、学習者としては、この場合にとめる、この場合にはねるということを、教科書どおりにするほうが練習しやすいことになる。「木」は教科書ではとめてあるがはねてもよい、「小」は教科書でははねてあるがとめてもよい、「干」の場合ははねてはいけない、「民」の場合ははねなければいけない、などかえって紛らわしいからである。

こうして、1字1字練習を積み重ねていくと、やがて新出漢字の字体に親しみを感じるようになり、それが、既出の基本画・複合画の組み合わせの違いにすぎないことが分かってくる。やがて、新出漢字について新たな基本画・複合画を覚える必要がなくなり、ただその組み合わせ方だけを覚

えればよいようになる。こうなれば、もう漢字の字体を覚えることが、それほど負担ではなくなるわけである。

### 3. 漢字の読み

漢字の持つ形音義のうち、2番めの「音」について取り上げることにする。「音」というのは、漢字の読みのことである。

漢字の読みについては、一つの漢字をいろいろに読むということが障害となっている。例えば、「人」の場合に、普通に用いられている読みは「ジン・ニン・ヒト・ビト・ピト」の五つである。学習者の中には、カードを作ってこのような読みを覚えようとする行き方も見られるが、それはむだなことである。一つ一つの漢字について読みを覚えることに費やす労力の割には、効果が上がらないからである。このようにして「人」の読み方を覚えたとしても、実際の漢字仮名交じり文において「人」という漢字に出会ったとき、その場合の正しい読みを見つけるのは、容易なことではないからである。

それならば、どのようにして「人」の読み方を覚えたらよいかということであるが、これには、次のような行き方が効果的である。例えば、「人」という漢字を用いる語として最初に「日本人」というのが出てきたとする。そのときに、[ニホンジン]という語を覚え、これを「日本人」と書くということを覚える。それとともに、「日本」を[ニホン]と読み、「人」を[ジン]と読むということを覚える。個々の漢字の読みというのは、個々の語を書き表したときの読みの分担にすぎないからである。しかし、その分担としての読みを覚えれば、次に同じような分担の形で「中国人」が出てきたとき、この「人」の部分を[ジン]と読むことが新出扱いではなくなるのである。

こうして、「人」について[ジン]と読むことを覚え、「人」を見て[ジン]と読むことができるようになれば、それで「人」という漢字の「ジン」という読み方は正しく覚えたことになる。その場合に、次に「人」を[ヒト]

と読む例が出てきたとすれば、これが読み替えである。この段階に至って「人」という漢字の新しい読み「ヒト」を覚えるとともに、この漢字が以前に「ジン」という読みで出てきたことを復習すればよいのである。そのような復習によって「日本人」の「人」と関連させれば、「人」という字体を新たに覚えるには及ばないからである。

実は、日常生活で日本語を母国語として用いる日本人の場合も、「人」という漢字の読み方が幾つあるかという問いには、正しく答えられないのが普通である。「人」という漢字には、次のような語を書き表す書き方も見られ、これらを含めて答えるのは、容易なことではない。

一人・ひとり	二人・ふたり	大人・おとな
流人・あま	素人・しろうと	玄人・くろうと
若人・わこうど	仲人・なこうど	商人・あきんど
落人・おちゅうど	狩人・かりゅうど	.....

これらを含めて全部でどのような読み方が行われているかということを知らなくても、「日本人」が[ニホンジン]と読めればよいのである。これを覚える立場でいえば、日本語としての[ニホンジン]という語を覚えることがまず必要である。それに関連して、その語を漢字で書き表すときの「日本人」を覚え、併せて「人」という漢字の「ジン」という読みを覚えればよいのである。

それならば、漢字の読み方を覚えるのに役立つ法則性は全く見られないかということ、そうではない。漢字の読み方を大きく分けると字音と字訓とになるが、それぞれに幾つかの有効な法則性が見られるからである。

まず、字音の場合であるが、字音というのは、その漢字の中国語としての読みが日本に伝わって用いられてきたものである。その点で字音というのは外来読みであり、その根拠を中国語に求めることができる。しかし、それが日本語の中で用いられるに及んで、同じ構成要素を含む漢字は同じ読み方をするという方向でまとめられるに至ったのである。例えば「五」というのは数字を表す漢字として割合に早く覚えることになるが、その次

に[ニホンゴ]というのが出てきて「日本語」と書き「語」を「ゴ」と読むということ覚えてとする。そのときに「語」という漢字の「五」の部分が「ゴ」という読みを表していると考え、「語」の読み方が「五」と同じだと覚えることは、「語」について「ゴ」という読みを覚えるのに役立つのである。

しかし、この覚え方をそのまま「英語」の「英」と「中央」の「央」との関係に及ぼすことはできない。「央」を「オウ」と読むことを知っていても、「英」の読みを「オウ」とするのは誤りである。「英語」という語が出てきたときに「中央」の「央」を思い合わせ、「英」の下部分が「央」と同じだと考えることは、「英」という字体を覚えるのに効果的である。しかし、「英」という漢字の読みを覚えるのには役に立たない。「英」の場合は、むしろ「映画」の「映」と同じく「エイ」と読むというふうに関連させるほうがよいことになる。その立場で見ると、「英・映」の読みに対し「央」の読みは例外ということになる。ただし、同じ「央」について、単独では「オウ」と読み、構成要素として「エイ」と読むというように相互に関連させることは、「央」を含む漢字の読みを覚えるのに役立つはずである。

次に、字訓であるが、字訓というのはその漢字の中国語としての意味に当たる日本語がその漢字の読みとして用いられてきたものである。その点で字訓というのは訳語読みであり、その根拠を中国語としての意味に求めることができる。しかし、中国語と異なり、日本語には活用語尾を持つ語が数多く存在する。例えば、[ヤスム]というのは動詞として割合に早く覚えることになるが、それは「休む」と書く。その次に[ヤスメル]というのが出てきて「休める」と書くことを知る。そのときに[ヤスム]を「休む」と書いたことと関連させれば、[ヤスメル]を「休める」と書くことが容易に覚えられるのである。ただし、このときに、「休」の部分を「ヤス」と読むのだと覚えるのは好ましくない。字訓というのはその漢字の中国語としての意味に当たる日本語であるから、「休」の字訓は「ヤスム・ヤスメ

ル」である。このように考えてこそ、「休」を字音で用いた「休日」を「ヤスム・ヒ」と理解し、「休心」を「ココロヤ・ヤスメル」と理解することができるのである。

それならば、一つの漢字にいろいろの字音があり、いろいろの字訓があるのをどのように扱ったらよいかということであるが、これも字音の場合と字訓の場合を分けて考えることが必要である。

まず、字音であるが、例えば「人」の字音に「ジン」と「ニン」があり、「日本人・中国人」は「ジン」、「通行人・保証人」は「ニン」と読み分けられている。このような読み分けの根拠を文法的な違いに求めると、「日本・中国」は名詞であり、「通行・保証」は動詞になる。このことを意味の面から取り上げると、「日本人・中国人」は本質的な「人」であり、「通行人・保証人」は一時的な「人」になる。いずれにしても、そこに何らかの違いが見られるのであり、それは「仏」を「フランスの意味」の場合に「フツ」、「仏教の意味」の場合に「ブツ」と読むのと、基本的には同じである。これらの中には、中国語として読み分けの行われていたのがそのまま受け継がれたものもある。「楽」を「たのしい意味」の場合に「ラク」、「音楽の意味」の場合に「ガク」、「易」を「やさしい意味」の場合に「イ」、「かえる意味」の場合に「エキ」と読むなどがこれである。ただし、中には、「キョ」と読む「去」について「過去」の場合に「コ」、「ジ」と読む「自」について「自然」の場合に「シ」というような存在もある。このような場合は、無理に根拠を求めるよりも、該当例の多いほうを原則とし、該当例の少ないほうを例外として覚えるほうが効果的である。

次に字訓の場合であるが、例えば、「下」という漢字の字訓としては、次のようなものがある。

した　しも　もと

さげる・さがる　くだる・くだす　おりる・おろす

このような例も、字訓がその漢字の中国語としての意味に当たる日本語だとすれば、ありうることである。それは、英和辞典において、一つの英単

語に数多くの日本語訳が当てられているのと同じである。「下」の場合に見られるいろいろの字訓も、要するに「下」という漢字の中国語としての意味に当たる日本語にすぎないのである。ただし、これを覚えるに当たって、一度にそのすべてを覚える必要がないことは、すでに取り上げたとおりである。まず「シタ」という読みで出てきたとすれば、「シタ」という読みだけを覚えるようにする。次に「クダル」という読みが出てきたときに、「シタ」という読みと意味的に関連があることを考え合わせるのは効果的である。そのようにして、「下」の読み替えが出るたびに、既出の読みと関連づけていくこともまた、「下」という漢字の字訓を次々と覚える上で役に立つことになる。しかし、それは「下」の新しい字訓を覚えるための手段にすぎないのであり、「下」の字訓にはこれだけあり、そのうちのこれこれが出たなどと考える必要はないのである。

漢字の読みを覚えるについて、もう一つ触れておかなければならないのが、変化音訓の扱いである。変化音訓というのは、[ガクセイ]を「学生」、[ガッコウ]を「学校」と書く場合に見られるような音の変化のことである。この場合、「ガク」と「ガッ」とどちらが「学」の基本的な字音かといえば、「ガク」のほうである。実際には、[ガクセイ]という語を覚えるときに「学生」という漢字書きを覚え、[ガッコウ]という語のときに「学校」を覚える。そのときに「学生」で「学」を「ガク」と読み、「学校」で「ガッ」と読むことを読み替えとして扱うには及ばない。この場合には、「ガク」というのが「学」の基本的な字音であり、「ガッ」はその変化音にすぎないからである。次のような場合も、いずれも変化音である。

山・サン→火山・カザン      白・ハク→純白・ジュンパク

日・ニチ→日数・ニッスウ      石・セキ→石器・セッキ

応・オウ→反応・ハンノウ

中には「本」について「1本・イッポン」「2本・ニホン」「3本・サンボン」と変化するようなものもあるが、これも「ホン」というのが基本の形である。

以上は字音について取り上げたのであるが、同じようなことは字訓の場合にも言える。「人」というのが「村人」の場合に「ビト」、「何人」の場合に「ビト」となるとしても、「ビト」や「ビト」を読み替えとして扱うには及ばない。この場合は「ヒト」というのが「人」の基本的な字訓であり、「ビト・ビト」はその変化訓にすぎないからである。次のような場合も、この種の変化訓である。

顔・カオ→横顔・ヨコガオ      酒・サケ→酒屋・サカヤ

雨・アメ→小雨・コサメ      六・ム→六日・ムイカ

ただし、「六・ム→六日・ムイカ」などは「八・ヤ→八日・ヨウカ」などと同じく、語としての特別の読みと考えてもよいのである。

#### 4. 漢字の意味

漢字の持つ形音義のうち、3番めの「義」について取り上げることにする。「義」というのは、漢字の意味のことである。

漢字というのは、一つ一つがそれぞれ独自の意味を持っている。文字が意味を持つなどということは、母国語で表音文字を用いている学習者にとって、その実態を理解することが困難である。しかし、そのことを十分に理解しておかないと、せっかく覚えた漢字も正しく用いることができない。「木」という漢字を覚えて「キ」と読むことを覚え、それを「木ます」などと用いるのは、要するに漢字が意味を持つ文字だということを理解していないからである。漢字を覚えるに当たっては、字体・読みとともに、ぜひともその意味を併せ覚えることが必要である。

それならば、個々の漢字を覚えるに当たって、意味を併せ覚えるにはどうしたらよいかということである。これにはいろいろの方法が考えられるとしても、最も効果的なのは字体と関連させることである。例えば、「木」という漢字であるが、これを見てあの植物としての「キ」が連想できればよいのである。こうして字体と意味とが密接に関連づけられれば、「木」という字体とその意味との関連を忘れることはないはずである。「木」に



ついでこのような覚え方ができるのは、「木」というのが漢字の字源として象形文字に属するからである。次のような象形文字の場合も、そのつもりで字体を眺めていると、自然にその表す意味の絵と結びつくようになるものである。

山 田 日 火 口 手 耳 魚 鳥 馬 ……

象形文字の中には、表しにくい事柄について関連する絵を用いるものもある。「おおきい意味」を表すのに人が両手を広げた「大」を用い、「たかい意味」を表すのに高層建築物の形「高」を用いるなどがこれである。

同じような覚え方は、会意文字の場合にも適用できる。例えば「休」であるが、中国では道に沿って大きな木が並んでいる。そのため、道を行く人が「ヤスム」ときは、その木の横に腰を下ろすことになる。こうして、「木」の左に「人」を加えたのが「やすむ意味」を表すのである。次のような会意文字も、このような要領で考えていくと、自然にその表す意味との関連が明らかになってくる。

林 森 庫 旅 胃 肩 看 劣 安 妻 ……

ここで、例えば「肩」について考えることにする。「戸」というのは「入口のトの形」を表した象形文字である。「月」というのは「ニクのかたまり」を表した象形文字「肉」の変形「ニクヅキ」である。それならば、「肩」というのは人間の体のうちのどの部分を表すかということになる。ここまで説明すれば、「肩」の意味を学習者自身で見つけ出すことも困難ではない。それは「戸」のような形で自由に動く身体の部分であり、「カタ」より以外に該当するものはないからである。「旅」のような複雑な字体の場合も、「方」が「ハタ」の形の象形文字で、右側の六つの画が「人」という字を三つ組み合わせたものだとして説明すれば、「旅」が「方人人人」のようになる。これは要するに団体旅行の形であり、「ハタ」を持ったガイドのあとにぞろぞろ続いていくあの形にほかならないのである。

このように覚えるに当たって、学問的な字源は必ずしも必要としない。例えば「東」であるが、本来は両端をしぼった袋の形の象形文字だとされ

ている。しかし、「木」のところに「日」が出る形を連想して「ヒガシ」と結びつけるほうが覚えやすいのである。また、字体の中には現代表記において改められたものもあるが、その場合は改められた形で考えてよいのである。例えば「歩」であるが、本来の形「歩」に対して現在の通用字体には点画が加わり、「歩」となっている。したがって、これをもとにすれば、「トマル(止)ことがスクナイ(少)」のが「アルク」だと覚えるほうが好都合である。

以上が漢字の意味を字体と関連させる基本的な方法であり、これが象形文字と会意文字の場合である。しかし、象形・会意以外の漢字の場合も、意味と字体とを関連させる要領を心得れば、決して覚えにくい存在ではないのである。まず、指事文字であるが、例えば「本」の場合がこれである。すでに「木」という字を覚えた学習者は、「木」の「モト」の部分を実験的な記号で示したのが「本」だということから理解できるからである。次のような文字も、いずれもこの種の指事文字である。

一 二 三 上 下 中 末 天 刃 引 ... ..

その意味を表すのに適当な絵を用いることができない場合に、事柄や関係を記号で加えるのも一つの行き方であり、これが指事文字である。

最後に形声文字であるが、実は漢字の大部分を占めるのがこの形声文字である。したがって、漢字の意味と字体とを関連させるに当たっては、ぜひとも形声文字の実情を心得ておくことが必要である。形声文字の特色は、主たる意味を表す基本部分と、部類分けを示す付随部分との組み合わせから成り立つということである。例えば「抱」について見ると、これは基本部分の「包」が「ツツム」という意味を持つ象形文字(「逆Sの部分」を上からツツンダ形)で、付随部分の「テヘン」が「テ」の部類を示している。つまり、「テでツツム」形「抱」が「カカエル」という意味を表すのである。同じようにして、「抱」は「ミズをツツンダ」ように見える「アワ」であり、「砲」は「イシをツツンダ」武器である。「鉋」の場合は「タベル」という部類で「ツツム」形になることであって、そこから「十分タベル意

味」の「アキル(タベアキル)」という意味が出てくるのである。

このように見てくると、「青」の意味が「アオイ」だということを知って、次のような漢字の意味を理解することも容易である。

清...水を表すサンズイを添えて、ミズの部類でアオイ形・キヨイ

晴...天気を表すニチヘンを添えて、天気の種類でアオイ形・ハレル

錆...金属を表すカネヘンを添えて、金属の種類でアオイ形・サビ

情...心を表すリッシンペンを添えて、心の部類でアオイ形・ナサケ

このように見てくると、「青」は「アオイ」という基本的な意味から、澄んでいる意味や偽りのない意味も併せ持つことが分かる。そこから、次のような漢字の意味も理解できることになる。

静...アラソイを添えて、アラソイが澄んでいる状態・シズカ

請...コトバを添えて、偽りのないコトバで頼む動作・コウ・ウケル  
形声文字については、このようにして意味と字体とを関連させることが可能であり、これがそのままこの種の漢字の意味の覚え方に適用できるわけである。

ただし、形声文字だからといって、必ずこのような覚え方をしなければいけないというものではない。形声文字の中には、会意文字のような覚え方をしたほうが覚えやすいものも少なくないからである。例えば「語」であるが、これは基本部分が「吾」、付随部分が「言」という形声文字である。しかし、すでに「五」と「口」とを知っている学習者の場合には、「吾」よりも「五・口」のほうに親しみが感じられるから、「語」を「言・五・口」の会意文字と考えたほうが効果的である。次のような形声文字の場合も、会意文字のような分解が役に立つのである。

線...シロイ・イトがミズのながれのように続く

趣...ミミで聞くとマタ・ハシッテいく

招...テとカタナとクチでマネク

同じことは、会意文字の場合にも言える。「話」というのは「言」と「舌」との組み合わせであるが、「舌」よりも「千・口」のほうが初歩的な漢字

である。その場合は、「話」について「言・千・口」という分解のほうが覚えやすいのである。次のような会意文字の場合も、本来の組み合わせよりも、次のような分解が役に立つのである。

好...オンナのコはスキだ

臭...ハナをオオキクしてニオイをカグ

宿...ヤネの下にヒトがヒャクニンいる

こうして、とにかく意味を字体にこじつけて覚えるということ、これが漢字の意味の効果的な覚え方である。

ただし、このようにして意味を字体と関連させるとしても、一つだけ注意しておかなければならないことがある。それは、個々の漢字の持つ意味が一つとは限らないということである。このことは、次のような字訓にも見られるとおりである。

空...そら・から

角...かど・つの

足...あし・たひる

供...とも・そなえる

行...いく・おこなう

覚...おぼえる・さめる

苦...くるしい・にがい

細...ほそい・こまかい

このことは、特に熟語を構成する漢字の意味を覚える上でも重要である。「来月」と「新月」では、同じ「月」でも意味が異なることになる。「長文」が「ナガイ文」だということを知っていても、「長男」を「ナガイ男」と考えてはいけぬ。「英語」が「イギリスのコトバ」でも、「英雄」は「イギリスのオトコ」ではないのである。

このような場合に必要なのが、読み替えに準じた意味替えという扱い方である。ただし、これも、読み替えの場合と同じように扱うことになる。最初にその漢字が出たときにその漢字の持つすべての意味を覚えるには及ばない。初出のときに初出の意味を覚えればよいのであり、次に別の意味で出てきたときに、その新しい意味を覚えていけばよいのである。なお、漢字によっては、意味替えとともに読み替えの見られる場合があることは、漢字の読みのところで「人...ジン・ニン」「仏...フツ・ブツ」「楽...

ラク・ガク」「易...イ・エキ」などの場合について取り上げてみたとおりである。

## 5. 結 語

以上、ここでは、漢字の覚え方を、字体・読み・意味の三つに分けて取り上げてきたわけである。そうして、このような取り上げ方でも分かるように、漢字については、字体と読みと意味とを密接に関連させて覚えるのが効果的である。しかし、このような覚え方の要領を知らない非漢字系の学習者にとって、漢字というものはどうにもとらえられない存在であり、これが日本語そのものを断念してしまうことにもつながっていく。それを防ぐには、漢字を教えるに当たって、それぞれの漢字の覚え方の要領まで教えることが必要である。そうして、そのような覚え方を教える場合に、ここで取り上げたような考え方が役に立つのである。

したがって、ここで取り上げた漢字の覚え方というのは、非漢字系の学習者を対象としたものである。しかし、このような内容そのものは、漢字系の学習者にも役に立つに違いないのである。漢字系の学習者のほうは、日常生活に漢字を用いてきたために、漢字というものに親しみを感じている。その点では、漢字の字体についての覚え方の要領は、すでに心得ていると考えてもよい。しかし、一つの漢字をいろいろに読むということは、それなりの難しさを伴うのであり、日本語における読みと字体と意味との関連については、新たな学習が必要である。そういう立場では、ここで取り上げてきた内容が、やはり参考になると考えてよいのである。

いずれにしても、ここで取り上げた内容は、教える側の参考としてまとめたものである。したがって、これを理論の形のままで学習者に与えるのは好ましくない。それとともに、漢字というのは、ある程度まで覚えてしまえば、学習者それぞれが自分に適した覚え方を工夫するものである。教える立場としては、早くそのような自学自習の形に持っていくべきであり、過保護にならないように心掛けるべきである。

## 参 考 文 献

- 武部良明「漢字の読み方」(角川書店)  
同 上「常用漢字用字用例辞典」(教育出版)  
同 上「日本語表記法の課題」(三省堂)  
藤堂明保「漢字語源辞典」(学燈社)  
同 上「学研漢和大字典」(学習研究社)  
林 大「当用漢字字体表の問題点」(光風出版)